

世の中どんなに変わっても、生きる基本は『読み・書き 』

## 人生史サークル 黄櫨の会

### 参加へのお誘い



代表世話人

末 安 良 行

長寿社会、私たちは定年後に長く自由な時間を持つことになりました。余生として過ごすにはもったいないことです。黄櫨の会ではこの貴重な第2の人生を実りあるものにしようと、夢と希望と責任感をもって頑張っています。平成9年4月の発会以来「書くこと」「読むこと」「語り合うこと」をモットーに、月1回の人生学講座、年3回会誌黄櫨の発行、年1回の文学研修旅行等を通して学修と親睦を深めています。

老いて学べば、則ち死して朽ちず（佐藤一斎）。いくつになっても学ぶことで若者の手本となり、死して後も名が朽ちることがないように、生ある限り知識欲、挑戦欲をもって人生を完全燃焼しましょう。

サークル名は①黄櫨は櫨<sup>はび</sup>の漢名（昭和初期、筑後地方は木ろうの産地でした）②後路はこれまで歩いてきた路③人生行路は今後生きる道④第2の人生も櫨紅葉のようにもう一花咲かせたいという願いをこめています。皆さんの参加をお待ちしています。

- **受講会員**—受講も投稿もできます。年会費10,000円。(会誌代含む)
- **投稿会員**—遠方か都合で受講できない人は、投稿のみすることができます。会誌代(3千円)を含めて年会費10,000円。
- **ヤング会員**—20歳以下の人、投稿会員に準じる。年会費5,000円。
- **購読会員**—年3回、会誌発行毎に1冊お送りします。年会費5,000円。
- **賛助会員**—本会の趣旨に賛同され、会誌を購読して頂く方です。会誌発行毎に2冊ずつお届けします。年会費10,000円。

★お尋ねは事務局 〒834-0025 八女市祈禱院563 ☎0943-24-2111 東迄どうぞ。



新刊号  
新巻第2号  
真緑第3号  
新秋第4号  
新巻第5号

平成9年8月 平成9年12月 平成10年5月 平成10年9月 平成11年1月



第6号  
深秋第7号  
随巻第8号  
新秋第9号  
第10号  
記念特風号

平成11年7月 平成11年11月 平成12年3月 平成12年9月 平成13年3月



新秋第11号  
新巻第12号  
春風第13号  
晩夏第14号  
第15号

平成13年8月 平成13年12月 平成14年3月 平成14年8月 平成14年12月



第16号  
第17号  
第18号  
第19号  
— 2004. 8 —

平成15年4月 平成15年8月 平成15年12月 平成16年4月 平成16年8月



— 2004. 12 —

平成16年12月 平成17年4月 平成17年8月 平成17年12月 平成18年4月



平成18年8月 平成18年12月 平成19年3月 平成19年8月 平成19年12月



平成20年3月 平成20年8月 平成20年12月 平成21年3月 平成21年8月



平成21年12月 平成22年4月 平成22年8月 平成22年12月 平成23年3月



平成23年8月 平成23年12月 平成24年3月 平成24年8月 平成24年12月



平成25年3月 平成25年8月 平成25年12月 平成26年5月 平成26年8月



平成26年12月 平成27年4月 平成27年8月

■ 人生史サークル黄檀の会沿革

- 平成9年(1997)4月 発会
- 11年(1999)11月 国務大臣表彰
- 16年(2004)8月 黄檀20号発刊
- 17年(2005)1月 自分史図書館開館
- 26年(2014)8月 黄檀50号発刊
- 29年(2017)4月 発会20周年予定
- 29年(2017)12月 黄檀60号発刊予定



黄檀叢書



走頭無路 末安良行 八女の四季 平田友武 人生史 藤島美子 私は接ぎ木だった 末安良行 ラーメン一代 原野ツタ子 大地が友だち 馬場久夫 小林真一物語 堺 孝幸 あなたとわたしの人生誌 武藤和平・月足美智子 80年の傘の下 山村知世夫 雪間の草 吉泉恒徳 窓の外は曇り空 江口ムツ子 わが青春に食いなし 高橋甲四郎 海碧き島よりふるさとへ 倉ノ下和代 樹陰流れる儘に 松延幸子 黄檀の旅 はぜの実 野中勝美



黄檀の旅 感じるままに 山崎陽子 ほしの残照 山岸良之 八女の方言歳時記 郷田敏男・梅本光男 昭和ひと歩き 堀 孝幸 警鐘 若杉繁喜



江崎の秋 松尾文郎 八女の方言歳時記 郷田敏男・梅本光男 松田さん八女を歩く 福原信彬 黄檀50号までの足どり手帳 椎念 猛 無名草花 吉泉恒徳



自分史・郷土出版物の  
収集展示にご協力下さい



館長 椎窓 猛

黄檀の会では郷土関係出版物や自分史などを収集展示する自分史図書館を開館しています。著者が心血を注ぎ、丹精こめた自費出版物が各地で次々に上梓されています。しかし発行部数も少なく、脚光を浴びることもなく時間と共に埋没してしまう運命にあります。

自分史は個人の記録にとどまらず、その時代の自然・風土・慣習・社会・生活・産業・交通・教育、次第に忘れ去られつつある戦争体験など、いま私たちが見直さなければならない大切なことがたくさん収録されています。また、もろもろの郷土出版物にはその本でしか知ることのできな

い事柄が記録されており、時間が経つにつれて地方の教育・文化・経済史を記録した第一級の資料として、時間の経過と共に光芒を増してくるものであります。

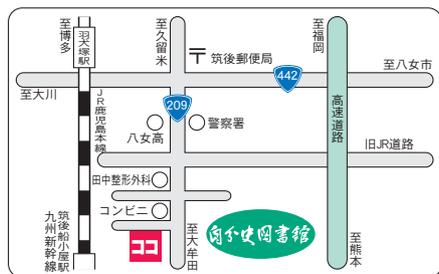
名もない一人一人が、精一杯の情熱を込めて自分の人生を綴ったものに何の偽りがありましょう。文章はつたなくとも、そこには人間の生き続けた証があります。共に生き続けた家族があり、地域の歴史があります。その人しか歩けなかった人生があり、その年代しか体験できなかった家庭や地域の歴史があります。

自分史図書館には全国各地で出版された貴重な自費出版物を中心に収集展示しています。皆さんの大切な人生を綴った自分史や地方の出版物あるいは皆さんのご家庭のみに眠ったままの本がございましたらぜひ共、自分史図書館に寄贈して頂き、より多くの人々の眼にとめていただき、後世のお役に立てるようご協力下さい。



入館無料 閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。

どうぞ来館下さい



蔵書目録あります ¥246 (送料込)  
インターネットでもご覧になれます。

jibunshiで

**自分史図書館**

〒833-0032 筑後市野町423-8  
TEL.0942-53-8122



## ひとよのかたみ 出版の充足感とその重量性

赤 星 端

人間が文化とさえ言えばその評価の水準には、必ずその国の政治、外交、軍備、産業、交通、運輸、企業などが表面に持ち出されるのが常識である。そしてそこに重く内在する芸術の芳香と光芒との華やきが忘れられ勝ちなのは、どうしたことか。

人のいや国民の思想、感情が止むにやまれず、詩歌となり、小説、随筆、論説などの型をとって口を衝いて出て来る。しかし口を出ただけでは一時的で長続きが出来ない。そこにライティングいわゆる出版が生まれ出るのである。こうした意味での著書は、偽らない人間の欲求であり、極めて高尚な作偽といわねばならない。

有名な唐の李太白は「大塊（大地）我に假するに文章を以てす」とその功德を自負した。私の恩人でもあった思川師は「筆は剣よりも鋭く、人の深奥を衝き、世の混濁を剝る」と言った。私はかつて歌集「柚子霜」「星滴」「あをぞら」などを出版したが、いづれも大方の歓迎するところとなって、盛大な出版記念の祝賀会を開いて貰った。こうした感激は終生忘れることは出来ない。

要するところ著作は大にしては世道人心を導き、天下国家を動かし、小にしては花に笑い、雨に泣くの情緒に浸る。これらの諸徳は地域の広隘を論ぜず、人の多少を問わず、著書出版の恩恵に頼るの他はあるまい。かくてその充足感と重量性とを存分に味わうことが出来る。この盛事まことに人間一生（ひとよ）の記念（かたみ）と言わねばならぬ。かように一つの国家、一つの民族それぞれの底流に耀く高度の思想、感情の発露即著作ワークこそ総合文化のバロメーターというべきである。

(久留米市)



## 心の充実 人生のはりあい

郷田敏男

自分の綴った文が活字になることは嬉しい。まして一冊の本として出版するなど、考えただけでぞくぞくする。たまたま私は、同好者内山一兄、大石喜八郎氏と『八女の方言』を出版したが、その時の張り感激と喜びが今でも実感として蘇ってくる。本当に出来上った本に頼ずりたい程嬉しかった。

人はそれぞれ何等かの形で稿を温めている。いつかの機会にこれを公にしたいと願っている。詩歌・随想、あるいは創作・自叙伝・郷土研究など色々あるであろう。だが、こつこつためたこの原稿が、希望空しく日の目を見ないで埋もれてしまうことが多い。

かつて、出版は庶民にとっては手の届かぬ高嶺の花であった。が、手の届くところへきていると感じた。出版は心の充実、人生のはりあいではなからうか。所詮、人間はみな何等かの形で、心の中を訴えたいという欲求を持っているから…。

(八女市)